

校長室だより



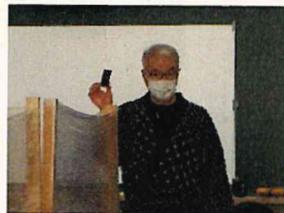
令和2年9月28日
校長 齋藤 瑞穂

墨アートに挑戦！

昨年に続き、5年生は「墨アート」に挑戦しました。講師は市島博司先生。墨アートの第一人者です。

3学年以上のみなさんは、毛筆書写(習字)を學んでいますね。筆に墨をふくませ、一画一画ていねいに、とめ・はね・はらいに気を付けて書いていると思います。その時使う墨は、たいてい「墨汁(墨液)」と言って、液体状になっている墨です。

一方、墨アートに使う墨は、固形の墨。硯ですって使います。水を加えながらじっくりすると、墨の香りとともに、墨の色はだんだん濃くなっています。「默想」で気持ちを整えた5年生は、自分好みの濃さをめざして墨をすり、その香りに包まれて、いつの間にか墨アートの世界へ。市島先生に様々な技法を教えて



いただき、試してみて、自分の作品のアイデアをふくらませていきました。



出来上がった作品からは、墨一色のはずなのに、濃淡やにじませ方、使った技法や道具によって、不思議と「色」や「温度」、「リズム」などが感じられます。もしかしたら、墨一色の世界だから、かえって作者の個性がはっきり出てくるのかもしれませんね。



5年生が書いた、市島先生への感謝の手紙のかんじやてがみの一部を紹介します。

○僕が墨アートを習って一番心に残っていることは、後から描いた線が先に書いた線の下に入ってしまうことです。後から描いた線が下に入るなんて予想もつきませんでした。

(1組 西森 庄馬さん)

○「墨アート」は黒を薄くしたり濃くしたりして、一つの色で表現するのでありました。「墨アート」は一色しか使わないけれど、グラデーションや様々な技法を使い、まるで絵の具を使ったような完成度になりました。

(2組 柴田 海都さん)

蟻虫培戸～むしかくれてとをふさぐ～

1年を24に分けた二十四節氣、72に分けた七十二候によれば、ちょうど今の時期は、二十四節氣の「秋分」、七十二候では「蟻虫培戸(むしかくれてとをふさぐ)」に当たります。

「蟻虫培戸」とは、塞さに備え、虫たちが木の根っこや土の下にもぐるなどして、冬ごもりのしたくを始める時期という意味です。チョウのように、幼虫がサナギになって塞さから身を守る虫もいますね。ようやく暑さが和らいできた頃に、もう冬のしたくを始めるとこのですから、虫たちのこよみにんげん磨は人間の暦より進みが早いのかもしれません。



保護者の皆様

オリンピック・パラリンピック教育の一環として、杉七小では日本の伝統文化に触れる活動にも力を入れています。「墨アート」もそのひとつ。世界に羽ばたく子どもたちが、訪れた国で、詩りをもって日本の文化を紹介できたらどんなに素敵でしょう。